

# 袋＝胞衣を被った子どもたち

—誕生・結婚・葬送の民俗と神話・昔話—

## 古川のり子

今日でも結婚や葬送の儀礼では、儀礼の主役（花嫁・死者）が独特の被り物を身につける。花嫁の角隠し・綿帽子・被衣、死者の額紙（紙烏帽子・角帽子・身隠し）・顔面を覆う白布などである。古くは蓑笠、傘、籠、天蓋、鍋蓋などを被せることも多かったという。通過儀礼の当事者がこうした被り物を身につけている姿は、民間に伝承された様々な物語の中にも見出される。この論文では、『御伽草子』の「鉢かづき」、昔話「姥皮」「田螺息子」「米福栗福」、「袋子」の伝承、さらには『古事記』の神話中の「袋を負った大国主神」などを取り上げて、儀礼や物語における「被り物」のもつ意味の一面を考察していきたいと思う。

### 1 通過儀礼における蓑笠

誕生・結婚・葬送の儀礼において、被り物として蓑笠を用いる例を次にあげる。（下線は筆者による。以下同じ）

#### A 葬送儀礼における蓑笠

- ① 近親者・棺つりなどが埋葬する。蓑や笠を棺の上におき、雨があたらないように埋めるのだという。（三重県磯部町坂崎）<sup>1)</sup>
- ② マゴヲダカセル 伯耆の西伯郡大高村では、入棺には蓑を衣せ笠を入れる他に、人形をも抱かせる。之を孫を抱かせるといふ。（鳥取県西伯郡）<sup>2)</sup>
- ③ シドモチ（青森県）・サガラ（福井県）・キノノ（福岡県）も死者の着物で、イロ縫いに集まった婦人たちが、尻を縫わない糸でひっぱり縫いをし、帷子・脚絆・手甲をつけさせ頭陀袋をもたせ、それに眼隠しといって三角のきれを額にあて、笠と杖を添えて道行き姿に装う。<sup>3)</sup>

死者に蓑笠を着せる、あるいは野辺送りの葬列に蓑笠・杖などを携行し棺に置いて埋めたり、墓の傍らに吊したりする。このような蓑笠は、あの世への旅装束であると説明されている。

## B 婚姻儀礼における蓑笠

- ① 花嫁が婚家に入る時に、両親の揃った男女の子供が各自松明を入口の地面に置く。花嫁は、あらかじめ備えている蓑笠を着て、火をまたいで勝手口から入る。(神奈川県津久井郡内郷村)<sup>4)</sup>
- ② 菅笠は角を隠すために花嫁が敷居をまたぐ時にかざす。(宮城県伊具郡丸森町川張)<sup>5)</sup>
- ③ カサハツシ 常陸多賀郡の山間部では、馬で来た嫁が馬上で盃を貰ひ、それからツマヲレガサをはづすが此祝ひをカサハツシと呼んで居る。(茨城県多賀郡)<sup>6)</sup>

婚礼では、嫁入り行列を仕立てて到着した花嫁が婚家に入るとき、蓑笠を着て入る、あるいはそれを被る真似をしたり、その下をくぐって家に入ったりすることが報告されている。これらの蓑笠は、もともとは花嫁が実家を出るときに身に着け、婚家に入るときにそれを脱ぐという形だったので、本来花嫁は、道中ずっと蓑笠を着けて来ただろうと解釈されている。<sup>7)</sup>

## C 誕生儀礼における蓑笠

赤子の誕生の儀礼において、蓑笠は明瞭な形では用いられない。しかし出産の直後、胞衣(エナ 子宮内で胎児を包む膜や胎盤)がなかなかおりのときの呪文の中に蓑笠が登場することを、小松和彦氏が指摘している。<sup>8)</sup>

- ① 後のもののおりない時は、「古里に忘れておきし蓑と笠、おくり給えや観世音菩薩」という歌を三遍唱える。(群馬県吾妻郡原町)<sup>9)</sup>
- ② 後産が早速おりない時には次の歌を三遍唱えると必ずおりるという。「古里に忘れ来りゃ蓑と笠送り下され国の宝を南無オンケンソワカ。」(愛知県北設楽郡段嶺村田峯)<sup>10)</sup>

③ 菅笠をもやした灰を飲むと後産がおきる。(福井県坂井郡)<sup>11)</sup>

つまり赤子にとっては、彼らを包んでいた胞衣が蓑笠に相当すると考えられていたわけである。小松和彦氏は、誕生の際の赤子を覆う胞衣と、婚礼の際の花嫁を覆う蓑笠と、葬式の際の死者を覆う蓑笠とを対比して次のように述べている。<sup>12)</sup>

誕生の儀礼においては、エナが蓑笠に相当するものとみなされ、赤子はあの世からこの世への移動のための旅装束としてのエナをかぶって生まれてくる。エナ＝蓑笠のメタファーは誕生という死から生への社会的境界を越えるための道具である。それゆえ、それを生のメタファーともいうことができる。

婚姻儀礼における蓑笠は、娘から嫁への社会境界を越えるための道具であり、社会構造から一時的隔離、儀礼的な死と再生（母体回帰）を示すしるしである。

葬送儀礼における蓑笠もまた同様にして、生者の世界から死者の世界へという社会的境界を越えるための道具である。ここでの蓑笠は死者もしくは死のメタファーとしての機能を帯びているのである。

三つの通過儀礼における蓑笠などの被り物は、社会的境界を越える象徴的な旅の装束であり、日常生活から儀礼的に離脱しているしるしである点において共通しているという。

		境界領域を移行	
赤子	あの世	—— 胞衣 ——→	この世
花嫁	娘の世界	—— 蓑笠 ——→	妻の世界
死者	この世	—— 蓑笠 ——→	あの世

ところで小松氏は婚姻儀礼の蓑笠について、神奈川県茅ヶ崎市の例をあげて次のように述べている。<sup>13)</sup>

神奈川県茅ヶ崎市高田では、婚家の入口で花嫁に男女の子供が菅笠を

さしかける儀礼が行なわれる。このときの笠をエナと呼び、誕生のときの胞衣と同じ意味であると説明するという。したがって、この地方では、赤子がエナを被ってこの世に移動つまり、“旅”してきたと同様に、花嫁もまたエナを象徴する笠をかぶって社会的境界を越えて婚家までの“旅”をすると考えられているわけである。つまり、嫁入り道中とは“死”と“再生”の旅、母体回帰のイメージを帯びた旅なのである。

花嫁の笠がエナと呼ばれていることは、通過儀礼の当事者が、新たに生まれ変わるために蓑笠＝胞衣に覆われて母胎内世界に帰って行くと考えられていることを表す。しかし小松氏は、このような解釈をこの例以外にまで広げていることを控えている。たしかに蓑笠の意味を胞衣に限定するよりも、「象徴的な旅のしるし」とした方が、日本の民俗中の様々な蓑笠を全体的に解釈できると思われる。それでも蓑笠のような「被り物」を、「胞衣」として見るとその意味がより良く理解できるようになるものも確かにある。そこで次に通過儀礼の「被り物」と「胞衣」、つまり「母胎内に帰って再び生まれ出ること」との結びつきを、昔話などの民間伝承や古代の神話の中に探っていくことにする。「被り物」のもつ意味は、物語の中に分かりやすく表現されていると思うからである。

## 2 物語の中の被り物

### (1) 鉢かづき

被り物をした主人公が登場する物語として、もっともよく知られているのは、『御伽草子』の中の「鉢かづき」だろう。主人公の姫君は、死の床に就いた母によって頭から大きな鉢を被せられる。

母上は流れる涙をおしとどめ、傍なる手箱を取りだし、中には何をか入れられけん、世に重げなるを姫君の御ぐしにいただきせ、その上に肩の隠る程の鉢をきせ参らせて、母上かくこそ詠じ給ひける。

さしも草深くぞ頼む観世音誓のままにいただきせぬる

「鉢かづき」は、父の後妻である継母にいじめられては母の墓前で泣いていたが、ついに家から追い出されてしまう。帷子一枚でさまよう姫君は、亡

き母のもとへ行こうと川に身を投げる。ところが頭の鉢が浮いたため漁師に拾われて生きながらえ、山陰の三位中将の屋敷で湯殿の火焚きとして働くことになる。寝る暇もない辛い日々のなかで、中将殿の息子・宰相殿が彼女を見せめ、二人は契りを結ぶ。しかし周囲の反対を受け、二人は家を捨てることを決意して涙にくれながら共に家を出ようとした、そのとき姫君の頭の鉢が落ちて、美しい容貌と財宝が現れた。

かくてとどまるべきにもあらざれば、夜もやうやう明方になりぬれば、急ぎ出でんとて涙と共に二人ながら出でんとし給ふ時に、いただき給ふ鉢かつばと前に落ちにけり。

宰相殿驚き給ひて、姫君の御顔をつくづくと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるにことならず。髪のかかり、姿かたち何にたとへんかたもなし。若君うれしく思召、落ちたる鉢をあげて見給へば、二懸子の其下に、金の丸かせ、金の盃、銀のこひさげ、砂金にて作りたる、三なりの橘、銀にて作りたる、けんぼの梨、十二ひとへの御小袖、紅のちしほの袴、数の宝物を入れられたり。

このあと宰相殿と姫君は晴れて結婚し、多くの子どもに恵まれて幸せに暮らしたという。娘を覆う「被り物」は、ここでは亡き母から与えられた「鉢」である。母代わりのこの鉢は、姫君をすっぽりと覆って自殺から守る一方で、死ぬほど辛い試練に追い込む。その死の時を経て鉢を脱ぎ捨てたとき、姫君は美しい女性となって宰相殿と結婚をする。姫君は、母の鉢の中で変容し再生を遂げたので、この「鉢」は彼女がその中で結婚可能な女性に生まれ変わるための「母胎」としての役割を果たしているといえる。<sup>14)</sup>

## (2) 昔話・姥皮

『御伽草子』の「鉢かづき」と近い内容をもつ昔話に「姥皮<sup>うばかわ</sup>」があり、青森県から鹿児島県まで広く伝承されている。

ごうぎな大尽があつて、嫁ごが娘を一人生んで死んだので、ごけ（後家）をもらいました。するとまた子どもがたくさん生まれました。継母はしよて（最初）の娘を憎んで、何とかして家から追い出してやろうと

考え、姉娘の乳母にいいつけて、どこへでもよいすけに家を出してくれ  
といいました。乳母はかわいそうだとは思ったが、しよせんこの家に置  
いては、これからどんなことになるか知れんと思つて、旦那に相談して  
金の千両も付けて家を出すことにしました。それから乳母は娘に向かっ  
て、「お前さんは金もたくさん持っているし、きりょうもよいから、よっ  
ぽど用心をしないば、危ないことに会ふかも知れんすかいに」いうて、  
ばばっ皮という物をくれました。娘はそれをかぶつて年寄り婆きの姿に  
なつて家を出ました。

娘はあちらこちら歩いているうち、ある町の旦那の家に水仕女に雇わ  
れることになりました。娘はいつも、ばばっ皮をかぶつて働いていまし  
た。据え風呂にはいるときでも、家じゅうの者のはいつた後にはいるこ  
とにしていたので、それを脱いでもだれにも見つけられる心配はない。

ある夜いつものとおりばばっ皮を取つて風呂にはいつていると、ふと  
若旦那がそれを見つけて、若旦那はその美しい女のことを思つて、とう  
とう病氣になってしまいました。旦那が心配して、占い師に占つてもらつ  
たら、「この若旦那は、うちに気に入った者があるすけに、それと添  
わしたらこの病氣はなおる」ということでした。それで上女子から水仕  
女まで一人一人若旦那の室に行つて、「薬でもお湯でも上がったらどう  
だいの」といわせてみたが、だれ一人気に入った者がなかつたので、若  
旦那はちょっと頭を上げただけで、すぐ寝てしまいました。最後に水仕  
婆きの番になると、「わたしみたいな婆がどうしましようばいの」とい  
うて、どうしても行こうとしなかつたが、どうでもまあ行つてみなさい  
といわれ、若旦那の室へ行つて、「お薬でもりましようかいの」とい  
うと、すぐに見破られてしまいました。ばばっ皮を取つてみると、若い  
美しい女になつたので、娘はそこの嫁になつて、いつまでも幸せに暮ら  
しましたということです。(新潟県見附市)<sup>15)</sup>

多くの類話においては、蛇のもとに嫁がされた娘が、蛇篲の死後山をさま  
よい、婆と出會つて姥皮を与えられたと語られている。この昔話で娘を覆う  
被り物は、まさに母の皮を意味する「姥皮」である。家を出た娘は姥皮に覆  
われ、老女の姿となつて試練の時を過ぎ、やがてその皮を脱ぎ捨てて美し  
い女性として生まれ変わり、若旦那と結婚できるようになる。娘に姥皮を与

えたのは「山奥に住むお婆さん」であり、山姥だと伝えるものもあるが、その正体は以前に助けられた「蛙」だったと伝える例が多い。

蛇が死んだので娘が帰ろうとすると灯が見える。そこに行くくと婆がいて宿を乞うと着るものがないから向こうの長者の家に行けと蛙の頭巾をくれる。家はなくなり蛙がいる。(岡山県岡山市)<sup>16)</sup>

娘は蛇から逃れて婆の家に泊まる。婆は娘に婆皮をくれ、長者の庭掃きになれと教える。婆は助けられた蛙。(兵庫県城崎郡)<sup>17)</sup>

娘は家に帰らない。婆が現れ、父に助けられた蟄蛙だといっておんばの皮をくれる。おんばの皮を着て村長者に奉公する。(青森県三戸郡)<sup>18)</sup>

蛙は、春に泥の中から湧き出すようにして生まれ、冬になると土の中に帰り春にまた生まれ出る。古墳の壁面に月と蟄蛙が描かれている(福岡県珍敷塚古墳) ことから分かるように、蛙は「死と再生」を繰り返す生き物と見なされてきた。また蛙は、おたまじゃくしの姿から蛙へと変身する生き物でもある。したがって蛙婆が与えてくれた「姥皮」には、蛙がもつこのような再生の力、変身して生まれ変わる力が込められていると考えられる。娘はこのような力をもった姥皮=母の皮に包まれ、大人の女性に変身して再生を遂げる。

ところで「姥皮」は、地域によっては「皮」ではなく他の「被り物」として伝承されていることも多い。

「身につけると老人にも子どもにもなる蓑」(山梨)、「隠れ蓑」(長野)、「美しい蓑」(埼玉)

「蛙の頭巾」(岡山)、「頭巾」(香川、岩手)

「婆の皮という綿帽子」(新潟)

「かぶると婆になる手拭い」(静岡)

「蛙のだんぶくろ(駄荷袋)」(新潟)

「蛙面」(山梨)

「着物」(静岡、石川、山形、岩手)<sup>19)</sup>

ここに「蓑、頭巾、綿帽子」などが見られる点が注目される。このことは、通過儀礼に用いられる「蓑笠、綿帽子、頭巾」などの被り物が、昔話中の「姥皮」と同じように「再生を促す母の皮」としての意味をもつと考えられていた可能性を示している。

### (3) 昔話・田螺息子

「鉢かづき」・「姥皮」の主人公の女の子を、男の子に置き換えたような物語に「一寸法師」（『御伽草子』）や「田螺息子」がある。次に、全国的な分布をもつ「田螺息子」の昔話をあげる。タニシ（あるいはサザエ、カタツムリなど）の殻に覆われた、小さな男の子の話である。

爺は毎日馬子に行き、婆は毎日田の草を取る。婆は大きな田螺を見つけ、家の盥に放す。翌朝、田螺は爺の代わりに馬に乗って問屋に行く。大きな田螺を見に出た嬢さんの着物の裾に田螺が食いついて離れない。旦那は嬢さんに田螺の嫁に行けという。嬢さんは家の宝の打ち出の小槌をもらって嫁に行く。田螺は自分を石の上に乗せて、五尺のよう男といって小槌でたたけ、という。嬢さんがそうすると、五尺のいい男が現われ、夫婦になって暮らす。（岡山県阿哲郡）<sup>20)</sup>

爺と婆が子供が欲しくて村の神に詣る。満願の日に神社の清水で田螺を拾い、つぶ太郎と名づけて大事に育てる。長者の家に奉公に行ったつぶ太郎に、爺と婆が好物のこうせんをやる。人にとられはしないか心配するので長者が、こうせんを盗む者はお前の嫁にしようという。夜中に長者のひとり娘の口にこうせんを塗っておく。長者は嘘と知らず娘を嫁にやる。家に帰って嫁とともに神社に行く。嫁がつぶ太郎を下駄で踏みつぶすと、きれいな若者になる。一生幸せに暮らす。（新潟県長岡市）<sup>21)</sup>

田螺の殻を被った小さな男の子は結婚を望んでいるが、そのままではそれができない状態にある。彼は旅あるいは働きに出て、詐術などを用いて妻となる女性を手に入れる。そして彼女によって叩きつぶされると、その殻がとれて立派な男として生まれ変わり、正式に結婚できるようになる。この昔話

には、田螺の「殻」という「被り物」の中での、主人公の「死と再生」のイメージがはっきりと表されている。「殻」「鉢」「姥皮・蓑・頭巾」などの「被り物」に覆われている間、彼らは社会的には死んでいる状態にある。「打ち出の小槌」は、主人公をより価値ある存在へと生まれ変わらせるために、いったん死なせるための道具なのである。

子ども	—— 鉢・皮・殻・蓑・頭巾・袋 —— 母胎内（死）	一人前の大人・結婚 （再生）
-----	------------------------------	-------------------

#### (4) 昔話・米福栗福

昔話・「姥皮」の類話の中に、主人公が覆われる被り物を「蛙のだんぶくろ（駄荷袋）」（新潟）とする例がある。<sup>22)</sup> 母親のことを「お袋」と言うように、「袋」というのは「母胎・子宮」を表すものとして、きわめて分かりやすい喩えである。昔話の一つに、この「袋」が重要な役割を果たすものがある。「姥皮」や「鉢かづき」に近い継子いじめの話で、「米福栗福」と呼ばれ、東日本・北日本を中心に分布する。話は、継母が実子には良い袋を、継子には底に穴の空いた袋をもたせて栗拾いに行かせることから始まる。

糠ぼここと米ぼこ、糠ぼこは先妻の子。底ぬけ袋とよい袋を持って姉妹が栗拾いに行く。妹は拾って帰るが姉の糠ぼこはいっぱいにならずに日が暮れて母の墓前で泣いていると、母が墓の下から出てきてえんま小袋と打ち出の小槌をくれ、袋に栗をいっぱい入れてやる。糠ぼこは美しいので大尽の家からもらいに来る。継母が悪くいうので皿に塩を盛り、松の小枝をのせて歌をつくらせる。歌は伝えていない。（皿々山参照）継母は妹に気の毒で、わんかごに入れて引き出すと田の中に落ちて田螺になる。（長野県下水内郡）<sup>23)</sup>

米ん福は先妻の子、栗ん福は後妻の子。継母は娘二人を栗拾いに行かせる。栗ん福は姉の後を行けといわれて歩くと、すぐに栗がたまる。日暮れになっても袋がいっぱいにならないので米ん福は山をさまよう。生母が現われて何でも出てくる袋を与える。村で芝居が行われる。袋から

晴れ着を出して見に行った米ん福を殿様が見初める。嫁に迎えに来ると  
継母は粟ん福を出す、召されたのは米ん福でりっぱな駕籠で城に向か  
う。(新潟県栃尾市)<sup>24)</sup>

継子は、破れた袋を持っている。彼女はその傷んだ袋を携えて山奥をさま  
よい、そこで生みの母の霊と出会って袋を繕ってもらい、あるいは新しい袋  
をもらって生還する。するとその袋から着物や宝物が出て、継子は美しい娘  
として殿様と結婚できるようになる。頭から被ってこそいないものの、この  
娘が持つ袋は、明らかに「姥皮」や「鉢」や「田螺の殻」と同じ役割を担っ  
ていると思われる。主人公を生まれ変わらせる「子宮=こぶくろ」としての  
役割である。傷んだ子袋はその機能を回復させ、結婚可能な娘や富を生み出  
した。ところでこの昔話の主人公の名前は地域によって異なるが、「米福、  
粟福、糠福」など、「～ぶく」と伝承されていることが多い。その中で「米袋」  
「粟袋」(青森)、「糠袋」(岩手)<sup>25)</sup>など、「～ぶくろ」と呼んでいる地域があ  
ることが注目される。この名は、主人公がただ袋を持っていたというだけで  
はなく、もともと「袋」と深く結びついた「袋付きの子」「袋の子」として  
の本質をもつことを示唆している。

## (5) 袋子伝承

伝統的な社会において、「袋子」と呼ばれる存在がある。子宮の中で包ま  
れていた膜に覆われたまま、生まれた子どものことである。

- ① ヨナ(胞衣)は汚物と一緒にして処置している。ヨナに覆われて生ま  
れる子をフクロゴ(袋子)という。(愛知県額田郡)<sup>26)</sup>
- ② 胞衣をかぶって出産したものは出世するという俗信がある。(福岡県  
山門郡)<sup>27)</sup>
- ③ 胞衣をミズハリと呼んでいる。子どもがミズハリに入ったままで生ま  
れることがある。めでたいことだとされている。(長崎県対馬)<sup>28)</sup>
- ④ 袋子 胞衣(えな)を被って生まれた子。(新潟県佐渡)<sup>29)</sup>
- ⑤ フクロゴ 袋子 福井県坂井郡雄島村(三国町)で、頭に袋状のもの  
をかぶって生まれた子をいう。袋子は顔が美しいといわれている。<sup>30)</sup>
- ⑥ 忌 袋子。妊婦は糠袋、茶袋、枕などの袋物を縫ってはならぬ。大阪

府泉北郡では、そんなことをすると袋子を生むという。あるいは袋を破らずに棄てると袋子を生むともいう。この俗信はかなり広くおこなわれている。<sup>31)</sup>

- ⑦ 袋を縫うと難産する。(長野県西筑摩郡)<sup>32)</sup>
- ⑧ 袋ッ子巾着後家の産だ沙汰 俳風柳多留 一〇八
- ⑨ Fucurogu 1) フクログ(袋児) 胞衣に包まれたまま生まれた胎児。  
日葡辞書<sup>33)</sup>

「袋子」は民間に広く伝承されていたようで、このような赤子を包む膜を「胞衣」と呼んでいる。袋子は、「出世する」「めでたい」「美しい」というプラスの評価がなされる一方で、忌み言葉とされ、袋子が生まれないように「袋を縫ってはならぬ」などとも伝えられる両価的な存在である。近松門左衛門の浄瑠璃『浦島年代記』(1722年)は、忌まわしく恐ろしい袋子が登場することで知られている。安康天皇の息子として生まれた袋子は、実は恨みをのんで死んだ大草香の臣の魂が宿った者(眉輪王)で、袋から出るやいなや三国を魔界にするといって父の天皇を殺す。結局は雄略天皇に討ち取られるが、その恐ろしい姿が次のように描写されている。

赤色一団の玉の袋子。谷をくだりにころころ。嵐にさそはれ木の葉につつまれ顕れ出。袋に風を入るがごとく。ふはふはひやうひやうふはふはふは。見るま程なく二かさ余りに成りたるは。あやしくも又すさまじし。

安康いぶせく思せ共猶恩愛の捨がたく。あれ見よいまだ生あればこそ玉に呼吸の働有。仕丁参て袋をひらけとの給へば。(中略) 牡鹿の角に袋を引かけ。ぐはらりとさけば此世のかぜを五たいに請。ぐつと伸ひたる男子の姿産髪左右へみだれちり。ふんばる足は鳥みの柱。惣身は朱ぬり。ちんば迄唐からし共いひつべし。

各あつと驚く所に。岩を飛こへ木の根をはねこへ。かけ来るあら熊むんずとつかみ。七八間どうと投ぐれば起なをり。ただ一さきと飛かかる。

全身真っ赤な蓬髪の男児で熊と戦うこの袋子は、山姥の息子の金太郎を彷彿とさせる。袋子を覆う「胞衣」は、鉢かづき姫の「鉢」や、姥皮の「皮」・

田螺息子の「殻」に相当する。袋子は、試練を経てうまく生まれ変わることができれば、昔話の子もたちのように立派な人間となって富をもたらすが、下手をすると死や災いをもたらす化け物にもなる。

袋子の伝承は古く、平安中期の伝記物語集『日本往生極楽記』（10世紀末）の中にも見られることが、飯島吉晴氏によって指摘されている。ここでは奈良時代の大僧正・行基の出生が、次のように語られている。

行基菩薩は、俗姓高志氏、和泉国大鳥郡の人なり。菩薩初めて胎を出でしとき、胞衣に裹み纏れり。父母忌みて樹の岐の上に閣げつ。宿を経てこれを見るに、胞を出でて能く言ふ。取めて養へり。

行基は袋子として生まれ、いったんは忌んで捨てられたがのちに偉大な僧侶となったという。飯島氏はさらに平安初期に遡り、『日本霊異記』（下・第十九）の中の、「卵のような肉団の殻が破れて女の子が生まれ、優れた尼僧になった」という話を、袋子の例としてあげている。しかし袋子の姿はさらに古く、奈良時代の初めに成立した『古事記』の神話の中に、すでに認められるのではないかと思われる。それは、袋を負った神・オホクニヌシである。

### 3 大国主神——袋を負った神

#### (1) 袋持ちの従者

オホクニヌシはのちに大黒天と習合し、七福神の一人で、大きな袋を背負った大黒様として今日まで民間に広く親しまれてきた。『古事記』の神話では、オホクニヌシはこの地上世界を開拓して、農作物が実る豊かな国土にした「国作りの神」である。またその国土の支配権を、高天原の天照大神の御子に譲り渡して出雲大社に祭られた「地上の神々の王」でもある。しかし彼ははじめから偉大な国の主（大国主）の神だったのではなく、その神話の始まりにおいては、彼はまず「大穴牟遲（オホナムチ）」神（大いなる土地の貴い人）という名の虐げられた神として登場する。



袋を負ったオホクニヌシ  
『日本の古典を見る古事記一』  
世界文化社、2002より

故、此の大国主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆国は大国主神に  
避けき。避けし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売を婚はむの心有  
りて、共に稲羽に行きし時、大穴牟遲神に袋を負せ、従者と為て率て往  
きき。

物語は、オホナムチとその大勢の兄弟の神々が結婚相手を求めて、稲羽の  
八上比売のもとに赴くところから始まる。このときオホナムチはまだきわめ  
て無力な神で、「袋」を背負わされ兄弟神たちの荷物持ちの下男として扱わ  
れていた。オホナムチは、サメに皮を剥かれて苦しんでいた菟に会い、正  
しい治療法を教えてやる。すると菟は、「袋」を負ってはいてもオホナムチ  
が八上比売を獲得するだろうと予言した。

故、其の菟、大穴牟遲神に白ししく、「此の八十神は、必ず八上比売  
を得じ。袋を負へども、汝命獲たまはむ。」とまをしき。

このあとオホナムチは、怒った兄弟の神々によっていじめられ、虐げられ  
て何度も死ぬことになる。これは「鉢かづき」や「姥皮」「米福粟福」など  
の継子いじめの物語の主人公たちが、継母などに虐げられて死の試練を受け  
るのと同じ状況である。『古事記』におけるオホクニヌシ神話の前半部は、  
未熟な「袋持ち」であるオホナムチが、偉大な「大国主神」となるまでの成  
長の物語だといえる。「袋」を背負うオホナムチの姿は、「鉢」を被った鉢か  
づき姫、「姥皮」を被った女の子、田螺の「殻」を負った男の子、とりわけ「袋」  
を持った米福の姿によく似ている。昔話などの主人公たちは死の試練を克服  
し、その鉢や皮や殻や袋から分離して、立派な娘や息子に生まれ変わって幸  
せな結婚を手に入れる。しかしオホナムチは神話の中で、彼ら以上に何度も  
死と再生を繰り返す。彼はまず兄弟神たちによって焼け石を抱かされ、火傷  
を負って死ぬ。しかし母神に助けられて生き返ると、今度は木の股の間に挟  
まれて殺されてしまう。母神の助けで再び生き返るが、なおも兄弟神たちに  
追われ、ついに「根の国」へと入って行き、そこでさらに厳しい試練を受け  
ることになる。

## (2) 根の国訪問

ここに亦、その御祖の命、哭きつつ求げば、見得て、即ち其の木を折りて取り出で活かして、其の子に告げて言ひしく、「汝此間に有らば、遂に八十神の為に滅ぼさえなむ。」といひて、乃ち木国の大屋毘古神の御所に違へ遣りき。ここに八十神覓ぎ追ひいたりて、矢刺し乞ふ時に、木の俣より漏き逃がして云りたまひしく、「須佐能男命の坐します根の堅州国に参向ふべし。必ず其の大神、議りたまひなむ。」とのりたまひき。故、詔りたまひし命の隨に、須佐之男命の御所に参到れば、其の女須勢理毘売出で見て、目合為て、相婚ひたまひて、還り入りて、其の父に白ししく、「甚麗しき神来ましつ。」とまをしき。

オホナムチが入っていく「根の国（根の堅州国）」は、大地の母神イザナミが支配する地下世界で、「黄泉の国」とも呼ばれている。イザナミは、国土の島々や山川草木などの世界の万物を生み出した「万物の母」であると同時に、死者の国（黄泉の国）を支配する死の女神「黄泉つ大神」でもある。「根の国＝黄泉の国」は、大地としてのイザナミそのものであり、すべての生命はここから生み出され、死んで再びここへ帰って行き、もう一度受胎されてまた地上世界へ生まれ出る。つまりここは、「死と再生」がおこなわれる場、生命の根源の国である。オホナムチがこの国に入るとき、「木の俣」の間を潜って行ったとされているのは、根の国がまさに大地の母神・イザナミの「胎内世界」であることをよく表している。オホナムチは、この世界の中では「袋」を背負っているように描かれてはいない。それは、この根の国自体がイザナミの大きな「子袋＝子宮」内世界だからだろう。

ここに其の大神出で見て、「此は葦原色許男と謂ふぞ。」と告りたまひて、即ち喚び入れて、其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘売命、蛇の比礼をその夫に授けて云りたまひしく、「其の蛇昨はむとせば、此の比礼を三たび挙りて打ち撥ひたまへ。」とのりたまひき。故、教の如せしかば、蛇自から静まりき。故、平く寝て出でたまひき。亦来る日の夜は、呉公と蜂との室に入れたまひしを、且呉公蜂の比礼を授けて、先の如教へたまひき。故、平く出でたまひき。亦鳴鏑を大野の中に

射入れて、其の矢を採らしめたまひき。故、其の野に入りし時、即ち火を以ちて其の野を廻し焼きき。是に出でむ所を知らざる間に、鼠来て云ひけらく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」といひき。如此言へる故に、其処を踏みしかば、落ちて隠り入りし間に火は焼け過ぎき。ここに其の鼠、其の鳴籥を咋ひ持ちて、出で来て奉りき。其の羽は、其の鼠の子等皆喫ひつ。

ここに其の妻須世理毘売は、喪具を持ちて、哭きて来、其の父の大神は、已に死りぬと思ひて其の野に出で立ちたまひき。ここに其の矢を持ちて奉りし時、家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、其の頭の虱を取らしめたまひき。故ここに其の頭を見れば、呉公多なりき。是に其の妻、牟久の木の実と赤土とを取りて、其の夫に授けつ。故、其の木の實を咋ひ破り、赤土を含みて唾き出したまへば、其の大神、呉公を咋ひ破りて唾出すと以為ほして、心に愛しく思ひて寝ましき。ここに其の神の髪を握りて、其の室の椽毎に結ひ著けて、五百引の石を其の室の戸に取り塞へて、其の妻須世理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、及其の天の詔琴を取り持ちて逃げ出でます時、其の天の詔琴樹にふれて地動み鳴りき。故、其の寝ませる大神、聞き驚きて、其の室を引き付したまひき。然れども椽に結ひし髪を解かす間に、遠く逃げたまひき。故ここに黄泉比良坂に追ひ至りて、遙に望けて、大穴牟遲神を呼ばひて謂ひしく、「其の汝が持てる生大刀生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大国主神と為り、亦宇都志国玉神と為りて、其の我が娘須世理毘売を嫡妻と為て、宇迦能山の山本に、底津石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷椽たかしりて居れ。是の奴。」といひき。故、其の大刀弓を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、始めて国を作りたまひき。故、其の八上比売は、先の期の如くみとあたはしつ。故、其の八上比売をば率て来ましつれども、其の嫡妻須世理毘売を畏みて、其の生める子をば、木の俣に刺し挟みて返りき。故、其の子を名づけて木俣神と云ひ、亦の名を御井の神と謂ふ。

オホナムチは、妻スセリビメの父であるスサノヲによってさらに厳しい試練を受ける。ここでオホナムチは、「蛇の室」「呉公と蜂との室」「土中の洞穴」

「八田間の大室」という危険な空間に籠もっては出るという形で何度も死と再生を繰り返す。これらの空間は、根の国という大きな母胎空間の中の、小さな子宮的空間であるといえる。オホナムチはこの空間に何度も入っては生まれ出ることを繰り返しながら、少しずつ成長を遂げ、最後に「根の国」というイザナミの大きな子宮から再び地上世界に産み出された。このとき、彼はもう「袋持ち」ではない。昔話などの主人公たちが「鉢」「皮」「殻」「袋」を捨て去ったように、彼も「袋」を手放して、オホクニヌシ（大国主）神という新しい名前と地位と、スセリビメという正妻を獲得した。そして初めて国作りの仕事を開始する。

オホナムチ	<p style="text-align: center;">———— 袋=根の国 ————→</p> <p style="text-align: center;">蛇の室 呉公と蜂の室</p> <p style="text-align: center;">土中の洞穴 八田間の大室</p> <p style="text-align: center;">母胎内（死）</p>	<p style="text-align: center;">大国主神・結婚 (再生)</p>
-------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------

### (3) まとめ

神話の中の「袋を負ったオホナムチ」の姿は、「胞衣の袋を被った袋子」の姿であると思われる。このような袋子の姿は、昔話の中では、袋を携えた米福として、また鉢を被った姫君、姥皮を被った女の子、田螺の殻を被った男の子として登場する。そして儀礼の中には、紙烏帽子・角帽子・蓑笠を被った死者、角隠し・綿帽子・蓑笠を被った花嫁の姿で現れている。彼らは皆、新たに生まれ変わるための通過儀礼の途上にある者たちで、その「被り物」の中で変容を遂げつつ、次に生まれ出るのを待っている。彼らに密着した「袋・鉢・皮・殻・帽子・蓑笠」は、彼らがやがて脱ぎ捨てるべき「胞衣=子袋」である。これらを脱ぎ捨てたとき、彼らはこの世の赤子として、または立派な大人、婚家の妻、あるいはあの世の神となって、新しい世界に生まれ出る。そしてあの世の神となった死者は、いつかまた胞衣の帽子を被って再びこの世に生まれてくると考えられていたのだろう。もちろん日本の民俗におけるすべての被り物が胞衣を意味するわけではないが、これもまた民間伝承や神話に深く根を下ろした考え方なのだと思う。

## 注

- 1) 佐藤米司『葬送儀礼の民俗』岩崎美術社、1971年、122頁。
- 2) 柳田國男『葬送民俗語彙』岩波書店、1937年、76頁。
- 3) 瀬川清子「晴着とかぶりもの」『日本民俗学大系6』平凡社、1962年、351頁。
- 4) 近藤直也『衾いの構造』創元社、1982年、210頁。
- 5) 同書、209頁。
- 6) 柳田國男・大間知篤三『婚姻習俗語彙』国書刊行会、1975年、39頁。
- 7) 小松和彦『異人論』筑摩書店（ちくま学芸文庫）、1995年、209頁。
- 8) 同書、206頁。
- 9) 恩賜母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』第一法規、1975年、244頁。
- 10) 同書、249頁。
- 11) 同書、246頁。
- 12) 小松前掲書（注7）、211-212頁。
- 13) 小松前掲書（注7）、210-211頁。
- 14) 心理学者の織田尚生氏は、鉢かづき姫の「鉢」や、次節にあげる昔話・姥皮の「皮」を、心の変容を促す容器としての「子宮」を意味すると考えている。織田尚生『昔話と夢分析』創元社、1993年参照。
- 15) 関敬吾『日本昔話大成』5 角川書店、1978年、173-174頁。
- 16) 同書、5、177頁。
- 17) 同書、5、177頁。
- 18) 同書、5、185頁。
- 19) 同書、5、175-186頁。
- 20) 同書、3、16頁。
- 21) 同書、3、18頁。
- 22) 同書、5、181頁。
- 23) 同書、5、91頁。
- 24) 同書、5、94-95頁。
- 25) 同書、5、103-104、108頁。
- 26) 恩賜母子愛育会編前掲書（注9）、249頁。
- 27) 同書、256頁。
- 28) 同書、256頁。
- 29) 『日本方言大辞典』小学館、1989年。
- 30) 民俗学研究所編『総合日本民俗語彙』3、平凡社、1955年。
- 31) 同書。

32) 恩賜母子愛育会編前掲書（注9）、316頁。

33) 土井忠生他『邦訳 日葡辞書』岩波書店、1980年。

\* 『御伽草子』『鉢かづき』・『古事記』は主に、日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。『日本往生極楽記』は思想体系（岩波書店）、『浦島年代記』は主に近松全集（岩波書店）に拠る。

## Children Wearing Bags (=Cauls):

### Folk Customs, Myths, and Folktales Involving Birth, Marriage, and Funerals

by Noriko FURUKAWA

In the rituals of weddings and funerals, the central figure (the bride or the deceased) wears special headgear. In the case of a bride, it is the traditional Japanese *tsunokakushi* (literally, “horn concealer”), and *wataboshi* (cotton hood), and in the case of the deceased, the *kamieboshi* (paper hat), which in ancient times was often a *mino-kasa* (straw raincoat with hat). Figures wearing such gear include the princess in the story *Hachikazuki* (The Princess Who Wore a Bowl) in *Otogizoshi*, the girl wearing a skin in the folktale *Ubakawa* (Old Woman’s Skin), the boy covered with a snail shell in *Tanishi Musuko* (The Mud-snail Son), and references to *fukurogo* (babies born with cauls) in indigenous folklore, and the girl wandering around with a bag in the folktale *Komebuku Awabuku*; and this sort of figure can also be seen in *Okuninushi no Kami* (The God, Great-Land-Master), who carries a bag on his back in an ancient myth. They are all going through rites of passage that represent rebirth, undergoing a transformation within the object that covers them and waiting to be born. The bag, bowl, skin, snail shell, *mino-kasa*, *tsunokakushi*, *wataboshi*, *kamieboshi*, and the like, are “cauls” destined eventually to be cast off. The person who discards them, after the arduous journey of death in the mother’s womb, is then born into this world as a baby, or as a mature adult, or as a wife in her husband’s family, or is born into a new world as a god of the hereafter. The dead who become gods of that world will one day be born into this world, again wearing a caul.